

明治三陸津波(1896)に関する

「捏造津波石」問題始末

山下文男*

§ 1. はじめに

本誌『歴史地震』の前号(17)に、「明治三陸津波(1896年)に関する一部、捏造された史料について」という私の論文が掲載されている。2001年9月の第18回歴史地震研究会(象潟大会)で発表を予定していた講演の要旨であった。予定稿まで提出しておきながら、大会を前にして急遽入院という事態になったため、実際には講演できなかったが、大会後、要旨を投稿して載せてもらったものである。論文の中で私は、二つの問題を取り上げている。

第1は、私の著書と冊子(『写真記録近代日本津波誌』(1984)と『写真と絵で見る明治三陸大津波』(1996))に転載、紹介した、当時の『風俗画報』(大海嘯被害録(1896))と『海嘯義捐小説』(『文芸倶楽部』臨時増刊(1896))に掲載されている岩手県唐丹村(現・釜石市)の海岸に、明治三陸津波の際に打ち揚げられたとする巨石(津波石)の写真は、実は、捏造されたものであり、本当は、かの「遠野物語」に出てくる、昔から遠野の山中にあって現在も観光の対象になっている弁慶伝説の「続石」(つづきいし)という巨石であることが判ったので、これを取り消すこと。調査した結果、この巨石に津波石であるとの虚偽の説明を付けて最初に発表したのは、1896(明治29)年7月15日付の『東京朝日新聞』の付録「三陸東海岸大海嘯被害図」であったことなどを、調査の順を追って、関連する写真や絵を示しながら明らかにした。

第2は、明治三陸津波の際の逸話として、これも私の著書(『哀史三陸大津波』(1982))に転載、紹介した宮城県唐桑村の予備兵「根口万次郎」の悲劇の話は、調べた結果、実際にあった話でも実在した人物でもなかったことが判明したことを、これも検討の結果を明らかにし、取り消した。論文の目的は、著書に転載した自分の責任を明確にすると同時に、研究者諸氏によって、この写真や絵、またエピソードが利用されないよう、注意を喚起することであった。

§ 2. 再論に至る経過

私としては、この論文の発表をもって、問題に一応けじめをつけたつもりであった。そして、最初に注意を与えて下さった住民の方や教育委員会、更には、私の論文の中で「遠野の山中にあった弁慶伝説による「続石」の写真を持ってきて、津波によって唐丹村

の海岸に打ち揚げられた石であるとの虚偽の説明を付けて発表した」と指摘、批判した『東京朝日新聞』の後継紙である現在の『朝日新聞』に、それぞれ、論文を掲載誌した『歴史地震』に、事の次第を説明する挨拶状を添えて送付した。『朝日新聞』の場合は、大組織なので郵便物の行き先が分からなく可能性もあると考えて、以前から地震や津波に関する署名記事などで名前を存じている科学部のT記者宛に発送した。

数日して、お贈りした関係者から、受け取りの電話や手紙が寄せられた。『朝日新聞』科学部のT記者からも早速、お礼の電話があり、意外なことであったが、なお、問題の「続石」の現場を取材したり、詳しい話を聞くために近く訪ねたいと、私の都合まで問い合わせてきた。が、その時は日程の折り合いがつかず、T記者の来訪は実現しないままであった。元々、大新聞本社の記者氏が、わざわざ東北の山中まで取材に来るなど、簡単なことではないと思っていたので、私もこの話は半ば忘れかけていた。

ところで私は、『歴史地震』(17)の論文で、けじめをつけたつもりでいたが、その後、ある研究者の方から電話があって、それとは知らずに、私の冊子に転載してある例の「津波石」の写真を、ご自分の新しい本に再転載したいと云ってきた。『歴史地震』に掲載した私の論文を読んでいなかったのである。それで私は、念のために2002(平成14)年度の歴史地震研究会(立山大会・9月7日～9日)で、もう1度、この問題を取り上げて再論することを思い立ち、事務局に講演を申し入れていた。

私が、新著(『君子未然に防ぐー地震予知の先駆者今村明恒の生涯』)を寄贈したのに対してT記者からのお礼の電話があった際にこの話をしたことから、取材の話が再び持ち上がり、私の立山出張を前にして延び延びになっていたT記者の来訪となった。

後で分かったことだが、たいへんなハードスケジュールで、朝、東京を出発して遠野市の山中にある問題の「続石」を写真におさめ、下山して遠野からJRの釜石線に乗車して釜石市から、更に三陸南リアス線に乗って大船渡市の盛駅に到着、タクシーで三陸町綾里の拙宅に訪して約40分の取材の後、待たせていたタクシーで大船渡駅から大船渡線に乗って一関市を経由し、その日のうちに帰京するというものであった。東京から来られる研究者や記者は珍しいこと

* 〒022-0211 岩手県大船渡市綾里石浜

でないが、今まで、こんな離れ業の人はいなかった。

歴史地震研究会・立山大会での私の講演は2日目(9月8日)であったが、それを前にして1日目(7日)の夕方、T記者から、その日の東京の『朝日新聞』夕刊に掲載された記事のコピーが、ファックスで宿舎に送られてきた。ファックスであるから記事や画像に不鮮明な部分があるのでどうしようかと思っていると、翌8日の朝、現地で手にした『朝日新聞』にも同文の記事が掲載されている。見出しは多少異なっているが、掲載されている「続石」の写真もこのほうが鮮明であり、前に立っている人物がT記者であることも確認できる。遠野の山中まで実際に足を運んで調査、確認した証拠でもある。お陰で私は、講演を前にして、そのコピーを出席者全員に配ることができた。

ハードスケジュールをものともしない取材といい、講演に間に合うようにファックスで記事のコピーを送ってくれた手際といい、T記者の熱意と誠意には敬意を惜しまない。が、その記事の中身と紙面での取り扱いについては、ここで若干、批判的にコメントしておかなければならない。立場によって読み方もいろいろあると思うが、私としては、納得できないものが少なからず残るからで、研究成果として新聞で取り上げてもらったからといって、この点、曖昧のままにしておくわけにはいかない。

§ 3. 記事の客観的な意義と問題

と云っても私は、この記事の客観的な意義を認めていないということではない。「山下さんによると、巨岩は津波から1カ月後の7月15日付東京朝日新聞の『付録』で初めて紹介された。海岸沿いの唐丹村(現釜石市)に打ち上げられた津波石として写真が掲載され『いかに潮勢の猛烈なりしかを想見すべし』との説明がついていた」。

「大船渡の研究者調査」と、まことに他人事のような見出しだが、丁寧によく読むと、問題の津波石なるものを最初に紹介したのは当時の『東京朝日新聞』であり、しかもそれは、見て来たような説明を付けて捏造したものであることが分かる記事にはなっている。従ってこの記事によって、問題の「捏造津波石」の写真が、今後、研究者やマスコミ、ジャーナリズムなどで、それとは知らずに利用される可能性が、より少なくなったとは云えよう。にもかかわらず「納得できないものが残る」と云うのは、「最初に紹介した」その『東京朝日新聞』の仕業や責任が曖昧で、後にこの写真を転載したその他の雑誌や100年後に更にそれを転載した私(山下)の軽率や責任ばかりが浮かび上がる印象の記事になっており、率直に云えば旧・自社の誤りを認めるに潔くないという感じを免れないからである。

記事には2枚の写真が付されている。

1枚は、遠野の山中にある「続石」の現存を示す写真である。石の前に記者が立つことによって石の大き

さも想像できるように撮られており「観光名所になっている続石＝岩手県遠野市」という説明が付けられている。そして、もう1枚は『海嘯義捐小説』に掲載され、また私が冊子『写真と絵で見る明治三陸大津波』に転載、収録した写真で、「山下さんが転載した『海嘯義捐小説』の津波石の写真」と、念入りのコメントが付けられて上記、現存する続石の写真の下に載せられている。

私が『歴史地震』で明らかにし、この記事の中でも述べているように、経過から云ってこの写真は、元はと云えば『東京朝日新聞』の付録「三陸東海岸大海嘯被害図」に掲載されたもので、捏造によって「津波石」の写真にされてしまったものを(それと承知していたかどうか、その辺の事情は不明であるが)転載・再録したものであった。従って問題を明らかにするというのなら、何よりも、その基になっている『東京朝日新聞』の付録に掲載されている写真をこそ、その旨の説明を加えたいと云うべきではないのか？

現在は何処の新聞社でも昔の記事や写真はマイクロフィルム化しており、画像が鮮明でないという云い分があるかも知れない。しかし、そんなことは弁解にも何にもならない。知る限りでも、現物はいくつかの図書館や研究室に保存されているし、その気になれば、いくらでも入手できたはずである。また、その写真を入手できなくて、やむをえず転載された『海嘯義捐小説』掲載の写真を載せざるをえなかったにしても、『朝日新聞』としての、もっと責任ある説明の仕方があったはずである。それなのに、わざわざ「山下さんが転載した……」写真などと書いて『海嘯義捐小説』掲載の写真を載せて事を済ませようというのは、はなはだ姑息な、責任逃れのやり方と云わざるをえない。こうして、他人事というよりも、むしろ転載した山下の軽率さばかりが浮かび上がるみたいにされている。

問題点として指摘したいことがもう一つある。新聞社では、取材記者の書いた記事がそのまま新聞に掲載するわけではなく、記事に添削を加え、更には見出しを付けたりして最終的にその扱いを決めるのは、通常、整理記者の責任と権限で、取材記者でないことぐらいは私もよく承知している。

ところで、この記事の見出しを見ると『東京朝日新聞』の責任を曖昧にしているだけでなく、笑い話のような扱いにもなっている。9月7日付夕刊の当該記事の見出しなど、ふざけているという感じさえする。

「三陸『津波石』実は『続石』」

「水に流せぬ100年前の誤解写真」

「名所発音似て混乱？」

津波石、実は続石と、あたかも言葉の音が似ていることから間違いが起こったかのような見出しだが、「津波石」という概念や言葉は、津波研究が進んだ最近30年ぐらい前からのもので、明治三陸津波の頃は「津波石」という言葉などなかったのである。「水に流

せぬ100年前の誤解写真」とは、駄洒落なのか？それとも笑い飛ばしてしまおうというのか？

そもそも、これは「誤解」でも「誤解写真」でもなかった。誤解とは、意味を取り違えるとか、間違っただけの理解をする、あるいは思い違いということであろうが、これは、その程度のものではなく、でっち上げ、無いことを偽ってこしらえ上げた捏造、あるいは「捏造写真」、偽物をつくるという意味の偽造、あるいは偽造写真であった。それを『東京朝日新聞』がやっていたのである。

「山下は「唐丹と遠野の音が似ていて間違っただけの可能性もある」と語ったとし、間違いの原因を音が似ていることに求めようする意図も見られる。

『歴史地震』に掲載した論文の中で、その可能性について言及し、質問されて私が「記者にそう語ったのは事実である。想像すれば、元の基は、東北弁の訛りによる「唐丹」(とおに)と「遠野」(とおの)の聞き違い、言い間違いに始まったたということは、大いにありうる話である。当時の新聞を見ると『東京日日新聞』の記者なども、取材に当たって、「奥州言葉に田舎的専門語を加えて話すれば耳なれぬ予(記者)は、その何の意なるやを詳らかにせず、通弁を介して」その気の毒な物語を聞いたという記事などもあり、実際にも、例えば「駒治郎」(こまじろう)を「熊治郎」(くまじろう)と間違っただけで書いたりしている。われわれの東北弁で語ると、クマとコマの音は似ていて、同じように聞きとられかねないのである。

が、だからと云って捏造、偽造の責任を東北弁の責任にするわけにはいかない。何故なら、例えば遠野(とおの)にある巨石の写真、唐丹(とおに)の巨石の写真だと偽って渡されたものにしろ、あるいは、そのように聞き違って手に入れたものにしろ、まるで唐丹村の海岸近くのその現場に立って、今、見ているかの如くに、あるいは実際に見て来たかの如くに、もっともらしい説明文を付けてその付録「三陸東海岸大海嘯被害図」に掲載したのは、紛れもなく、津波からまる1か月経過した7月15日(1896〔明治29〕年)付の『東京朝日新聞』だったからである。そして、それが、更に10日後の25日付『風俗画報』や『海嘯義捐小説』に次々と焼き直し、転載され、100年後には、それをまた私が転載したという経過なのである。

確認のために、その『東京朝日新聞』付録(『三陸東海岸大海嘯被害図』)に掲載された写真の説明文をもう1度ここに引用しておこう。

「唐丹村は百六十余戸全部流失最も惨禍を究む退潮後見れば同所海岸に巨石を打ち上げ石の上に石を累ねて最奇観なり以て如何に潮勢の猛烈なりしかを想見すべし」

「退潮後見れば……」「最奇観なり……」というこの説明文を読んで、これは真っ赤な作り話であって、本当は遠野の山中に座っている巨石の写真だなどと誰が想像できようか？

正に「事実でない事を事実のようにこしらえて言う」(『広辞苑』岩波書店)捏造だったのである。

§4. むすび

が、後で考えると、側に立っている杉の巨木が健在であるなどから、これは捏造であることを見抜くのは必ずしも不可能でなかった。研究者としてその偽りを見抜けなかった私は、自身の不明を恥、学会誌という公的な場で、転載した責任を明確にし、自己批判して取り消した。『朝日新聞』も、事の仔細が判り、記者が現地にも出掛けて事実を確認したのなら、小細工を思わせるような変な見出しなどを付けずに、潔い記事と見出しによって、また写真も再録して、責任の所在を明確にすべきではなかったのか？そもそもこの問題は、2万2000もの人々が溺死するという、悲惨きわまりない歴史的な大災害についての報道と関連した問題なのであるから、社会面で扱うにしても、もっと厳肅、慎重な姿勢で記事を扱うべきだったと考えるのである。

大新聞には、それぞれ捏造記事や写真で、社会の大きな批判を受けた歴史がある。問題の人物に会ってもいないのに、会ったかの如くに、もっともらしいインタビュー記事を掲載したり、事件が無かったのに、自らの細工によって事件をでっち上げて報道したなどで身を切られるような訂正と自己批判を余儀なくされた苦痛の歴史である。そうした事件と比べたら、この問題は100余年も前の事であり、現実の社会に与える影響も実害も大きくはないのだから、あまり抵抗なく、率直に真実と責任の所在を明らかにできそうなものだが、それが曖昧にされるというのは、どうしてだろう？政治や社会悪については、常に筆鋒まことに鋭いかに見える大新聞が、自社にかかわる問題になると、何故にこうも歯切れがわるくなるのだろうか？

友人のある研究者は「大新聞は、簡単にはその非を認めたり、取り消したりしませんよ」と笑っていたが、やはり、そういうものかと、今更ながら考えさせられる始末であった。残念と云うほかない。

取材に訪れたT記者のご苦勞はご苦勞として、やはり云うべきことは云っておかなければならないと考えて、その経過と私の考えをここに明らかにした。

なお、本稿の要旨と、これを始末記として『歴史地震』の次号に掲載してもらつつもりでいることは、T記者にも手紙でお知らせしておいたので付言しておく。

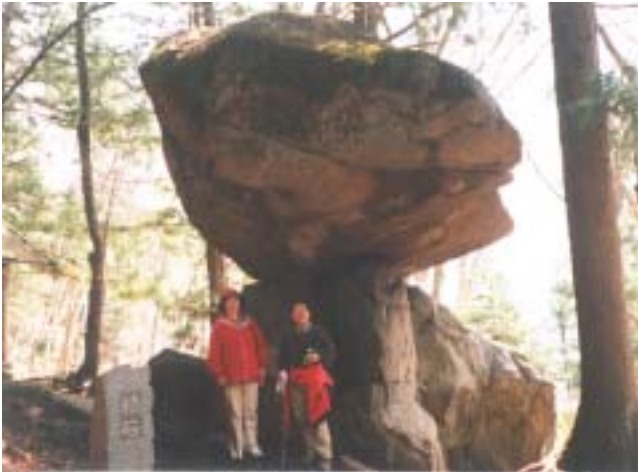
参考文献・史料(年代順)

1896〔明治29〕年7月15日『東京朝日新聞』付録「三陸東海岸大海嘯被害図」

1896〔明治29〕年7月25日『風俗画報』臨時増刊第百十九号「大海嘯被害録」

1896〔明治29〕年7月25日 『文芸倶楽部』臨時増刊「海嘯義捐小説」
 1984〔昭和59〕年4月1日 山下文男『写真記録近代日本津波誌』(青磁社)
 1995〔平成7〕年6月15日 山下文男『写真と絵で見る明治三陸大津波』(自費出版)

2001〔平成13〕年3月31日 山下文男「明治三陸津波(1896年)に関する、一部捏造された史料について」『歴史地震』第17号(歴史地震研究会)
 2002〔平成14〕年9月7日『朝日新聞』東京版夕刊、同8日付東北中信越版



昔から遠野の山中にあって今も観光の名所になっている伝説の「続石」。古代人の墓とも、武蔵坊弁慶が持ち上げて作ったものとも云われている。



同、7月25日発行『海嘯義捐小説』(『文芸倶楽部臨時増刊』)掲載の写真。(説明文)
 「唐丹村花露里海岸の大石打揚」



明治29(1896)年7月15日付『東京朝日新聞』付録に掲載の写真。(説明文)
 「唐丹村は百六十余戸全部流失最も惨禍を究む退潮後見れば同所海岸に巨石を持ち上げ石の上に石を累ねて最奇観なり以って如何に潮勢いの猛烈なりしかを想見すべし」



同、7月25日発行『風俗画報』『大海嘯被害録』掲載の挿絵。(説明文)
 「唐丹海角の森林中に打ち揚げし巨石」